HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	巻頭言
Author(s)	大野, 栄三
Citation	教授学の探究, 25
Issue Date	2008-02-14
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32328
Type	departmental bulletin paper
File Information	01 intro.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

巻　頭　言

大　野　栄　三

格差拡大が社会問題として多方面で議論されている。日本では高校が受験難度によってランキングされ，学区内で序列化されている。大都市やその近郊と過疎地を比べれば学力テストや進学率にちがいはある。周知のことである。このような事態を格差と呼ぶのであれば，教育における格差は今に始まったことではない。こうした事態はほめられたことではないが仕方がないというあきらめ，競争があってこそ優れた人材が育つという単純な見方，その他さまざまな反応がある。しかし，この事態そのものが何とかなるわけではない。正直なところ，この格差を一挙に解決できるような知恵を私は持っていない。教育方法学を研究する集団の一員として，少しでも多くの教師が，今以上に良い授業が実践できるように，可能なこと，なすべきことを精一杯行うだけである。

本誌 24 号（2007 年２月発行）で，倶知安農業高等学校における大学院生たちのフィールドワークを報告した。授業への参加と生徒との交流を通じて，彼らが経験していない学校種での生活や，そこでの普通科教科教育について理解を深めることができたと考えている。今年度（2007 年度）は，大学院生が授業プランを研究開発し，倶知安農業高校でその授業を行った。昨年，修士課程１年時に参加した学生は，そのときに得た知見をふまえて，修士学位取得のための研究の一環として検討してきた授業プランを実践した。今回はじめて参加した修士課程１年の学生は，学部時代に検討した授業プランをもとに授業実践に取り組んだ。本誌今号に２本の論稿が掲載されている（阿出川論文，林論文）。

大学院修士課程の講義（２単位）として実施しているが，今のところ，修士課程１学年で高校見学や授業観察を行い，２学年に自身の授業プランを実践するという２年間で完結するプログラム（合計４単位）を基本に考えている。今年度は，高校との事前，事後の打ち合わせを大学院生が主体的に担ってくれ，大学教員の負担はかなり軽減された。また，高校訪問中の宿泊所でのミーティングでは，博士課程の大学院生がずいぶんと活躍してくれた。

こうした学生の活躍をはげみに，この大学院教育プログラムを継続，改善していくことが，格差社会に対して私ができること，私がなすべきことだと考えている。